

現在の茂原市域が形作られたのは戦後二度に渡る広域の市町村合併が行われた結果です。言うまでもありませんが、それまでは北から本納町、豊田村、東郷村、二宮本郷村、茂原町、五郷村、鶴枝村があり、それぞれ役場が置かれ、学校が造られたのです。さらにそれを遡る江戸時代にはほぼ大字単位の村があり、そこでは村役人を中心とした自治能力を有する村々が存在していました。ではそれ以前の中世またここで採り上げる古代ではどうであったのか。実は、市史編さんの過程で見えてきたものがあります。それは一口に茂原といってもそれぞれに固有の地域性があるということですから。さらに言うそれは県内の他の市町村にはない独自のものといってもよいでしょう。では、具体的に幾つかの事例を紹介することにします。

―横穴と古墳―

古墳時代(約四世紀～七世紀)はその名の通り古墳が造られた時代です。ところが茂原市域では横穴墓よこあなほといつて、崖のうえに横穴を掘り、そこに遺骸を葬る墓のかたちが行われていきます。この墓制は古墳より遅く東国へ伝わり、本県に現れるのは六世紀末頃のことです。つまり古墳の造営が盛りを過ぎた頃に急に広まり、そして奈良時代の初めには廃れてしまいます。



▲圏央道建設に伴う横穴墓の調査状況

しかしそれが市域総ての傾向かという点、そうではあり

ません。九十九里の平野部では山そのものがあります。当然といえばそれまでですが、代わりの墓制もはつきりしないのです。また、山があつても鶴枝北部から五郷のように数が少ない地域もあります。その要因は何処にあるのでしょうか。

た、長尾から小林方面でも丘陵尾根にそれらしき高まりがみられます。本納橘樹神社たちばな背後の丘もその可能性がります。そうすると当地の人々は地域ごとにその置かれた環境に応じて墓制を営んだといつてよいでしょう。

―墓と集落の関係―
もう一つ謎とされてきたのが、横穴を造つた人々は何処に居たのかということ。この集落が不明なまま七世紀の集落が不明なままであったからです。鶴枝遊水地造成に伴う調査で見つかった中原遺跡は市内では唯一といつてよいこの期の遺跡ですが、これは下永吉の古墳群に対応する集落でしょう。実は工事等や分布調査などで採集した遺物を広く検討すると、川の縁辺や丘陵の裾下位に横穴や古墳と同時期の集落が眠っていることがわかってきました。概して深く埋没しているために地表ではなかなか捉えにくいのです。台地の展開する千葉～市原とは大きく異なる点です。



▲昭和10年頃の押日横穴群の旧状
(『考古学雑誌』26巻第一号 1936.1.1から)

市史の調査を通してわかったことは、横穴の分布が地質と深い関係にあるということ。俗に青岩と呼ばれている均質なシルト質の岩山からなる本納東部から二宮本郷が最も沢山の横穴が造られたのは崩れにくい地質のためなのです。逆に、茂原公園から五郷にかけて少ないのは土が砂勝ちになっているからです。つまり同じ岩山地帯でも地質構造によって様相が異なるわけで、桂～上太田付近が少ないのも同じ理屈です。

―墓と集落の関係―
もう一つ謎とされてきたのが、横穴を造つた人々は何処に居たのかということ。この集落が不明なまま七世紀の集落が不明なままであったからです。鶴枝遊水地造成に伴う調査で見つかった中原遺跡は市内では唯一といつてよいこの期の遺跡ですが、これは下永吉の古墳群に対応する集落でしょう。実は工事等や分布調査などで採集した遺物を広く検討すると、川の縁辺や丘陵の裾下位に横穴や古墳と同時期の集落が眠っていることがわかってきました。概して深く埋没しているために地表ではなかなか捉えにくいのです。台地の展開する千葉～市原とは大きく異なる点です。

一体茂原とはどんなところだったのでしょうか。しかも遡るほど。この命題に応えるためにはさらに多くの時間を要しますが、少しずついとち見出されてこようとしています。遠い昔の出来事のようにですが、意外に今日に繋がっていることが多いことに気がきます。そのことを記録に残すことは茂原の未来にとって必要なことではないでしょうか。

ところが、従来茂原は研究上古墳が無い地域として知られていました。しかし、鶴枝の下永吉地区ではかつては前方後円墳を含ままとまった古墳群が存在し、上永吉の丘陵上にも群をなしています。ま

た、長尾から小林方面でも丘陵尾根にそれらしき高まりがみられます。本納橘樹神社たちばな背後の丘もその可能性がります。そうすると当地の人々は地域ごとにその置かれた環境に応じて墓制を営んだといつてよいでしょう。

茂原市史編さん委員会
編さん委員 小高 春雄
問合せ
美術館・郷土資料館
TEL 26 2131 FAX 26 2132